

Roles and Challenges of Rabbis in the Modern World: Progressive Judaism and Interfaith Dialogue

現代におけるラビの役割と挑戦 進歩派ユダヤ教と宗教間対話

ラビ、ジョナサン・マゴネット博士

1. はじめに

現代における「ラビの役割とその課題」についてお話をしようとお招きいただきました。ユダヤ教の指導者としてのラビの役割は、広範囲の問題を含みます。現代におけるユダヤ教の役割とそれに関わる課題とは一体何なのでしょう。私は、この「ラビの役割とは何なのか」、という課題につきましては、戦前ドイツのユダヤ人社会の中心的指導者であったラビ・レオ・ベック博士に導かれてきました。博士は、(大戦中、ホロコーストによって収容された)テレージエンシュタット強制収容所から生き延び、戦後、ユダヤ社会およびより広い一般社会での指導に尽力し、さまざまな課題に取り組み続けられました。1946年、ロンドンで開かれた戦後初の進歩派ユダヤ教世界連合(WUPJ)の会議での会長就任演説にて、すでに70歳代であった博士は以下のように述べました。

(戦前に開かれた)最後の世界連合の会議以来、過酷な試練がユダヤ民族と人類に降りかかった…。我々は、何を、そして誰を失ってきたのかを決して忘れてはならない。(注1)

当時、ユダヤ人達はいかにしてホロコーストの生存者および難民を支援するのか、ということに苦心していましたが、博士のヴィジョンは、つねに未来の方向に向いていました。その際、博士は、二種類のユダヤ教の構想を挙げました。1つ目は、「小さなユダヤ教」、それは主に会衆(信者集団)を中心としたユダヤ的な生き方を築く、というものです。博士は、次のように指摘します。

会衆は、ユダヤ的な生き方を築く生ける細胞であり、会衆が存在しないユダヤ教は存続することができない。しかし会衆の存在することそのものが究極の目的なのではない。むしろ会衆はユダヤ教のために、大いなるユダヤ民族の総体のために存在しているのであり、そこにおいてのみ、その真のユダヤ的な生き方が存在する、という事を忘れてはならないのである。(注2)

私が「会衆」に関するベック博士の言葉にあえて付け加えるならば、「会衆」とは、その民主的構造、福祉に対するその強調、教育、社会的責任、良き同胞意識などと共に、市民社会を作り上げる重要な基盤の1つであると考えます。

しかしながら、そうした「小さいユダヤ教」と平行して、ベック博士は、「より大きなユダヤ教」に献身していくよう促しました。

ユダヤ教は、あらゆる時代に発生する人類にとって困難な問題に直面した時、傍観してはならない。表現するために心の中で奮闘し、社会の中で解決のために戦わなければならない。我々は、ユダヤ人として、その時代特有の問題から目をそらして、それらを目の前にして逃げ隠れするようなことがあってはならない。即ち、そうした諸問題は、我々が属している「ユダヤ教」の外で、あるいはユダヤ教以外の領域で起こっているものと考えべきではない。我々は人類のためにも存在しているのである。特に大戦後のこの世界において、我々には、自ら問うべき問題があり、かつそれに答えを出さねばならない。人類が持つ良心の覚醒のために、我々は存在している。我々はより崇高な要請に応えるために、まず「否」と言わなくてはならないこともある。正義、愛、約束のために、まず告発せねばならないこともある。我々は我々自身であるために、また神のために断固とした態度を貫き、世の中に対して時として「否」と言い、告発していこうではないか。(注3)

民族としての存続を目的とすること、そしてそこに人類全体にとっての意味を見出すことは、ユダヤ教にとって当時も、そして今日でも変わりはありません。しかし、そのためには「小さなユダヤ教」、つまりユダヤ・アイデンティティを築き、その継続を保証するユダヤ共同体という土台が必要です。その領域において、ラビは指導者として主な役割を果たしています。そのような意味で、ラビは、ユダヤ教の世界における、あらゆる症状を診断する「開業医」のようなもの、日々の問題に直面している人々がまず向かう相手と言えるでしょう。それと同時にラビはまた、外部の世界に対して、ある種の「大使」としての役割をも持ちます。それは、迅速なコミュニケーションが要求される開かれた社会において、年々大きくなる役割でもあります。この講義で、私はラビという職務が持つこれら2つの側面に触れたいと思うのですが、まず、はじめにラビという職務の性質に関する歴史的な背景をお話しようと思います。

「ラビ」という語は、「師匠」や「師」を意味する「ラヴ」というヘブライ語から派生しています。それは、紀元1世紀のパレスチナにおいて出現した、新しいユダヤ教の宗教指導者の称号を指すものとして用いられるようになりました。エルサレムの神殿での祭儀を司り、その称号が世襲的に受継がれていく「祭司」とは異なり、ラビは、自らの

学識を通してその称号を得、またヘブライ語聖書および口伝律法の伝統の註釈・釈義を施す解釈者として仕える学者でもあります。ユダヤ人は、行動を全て規定する法的契約を通して、神との関係を持つと理解しているのですが、ラビの職務は、その神と結ばれた契約から生じる諸義務(法)を解釈し、現在の生活に適用させることです。ヘブライ語聖書に含まれる主要な資料およびそれに付随している宗教的論考を包括する用語は「トーラー」といいます。それは「律法」として翻訳されることが多いようですが、正しくは、(神の)「教え」「手引き」と訳す方が、より理解が深まると思います。初期には、さまざまなラビの学派が勃興し、トーラーの規定に関する議論を行い、多数決にもとづいて、民主的に判断を下していました。ラビ達は、「ユダヤ教」と今日私達が呼ぶものを創始し、社会変革を促した指導者でありました。ラビ達は、エルサレムの神殿祭儀に基づく宗教から、トーラーの学習を重要視すると共に、家庭での礼拝を主軸とする宗教にユダヤ教が変わる過程を監督してきたのです。こうした宗教的構造上の変化の故に、ユダヤ民族はローマによってエルサレムの第二神殿が破壊され、世界に良く知られた人々の離散の後にも、生き残ることができたのです。初期のラビ達(タンナイーム)によるトーラーの議論およびその法規決定を含んだ記録は、紀元2世紀に「ミシュナー」という法典として成文化され、そのミシュナーについての註解は、以後3世紀にわたって敷衍され、「タルムード」として知られる法典として編纂されていきます。「タルムード」には、2つの版が存在し、1つはパレスチナにおいて、もう1つはバビロニアにおいて編纂され、特にバビロニア・タルムードは、ユダヤ教においてラビによるトーラーの高等研究における中心的なテキストとして機能し、現在に至っています。

初期には、ラビは生活の糧を得るために、他の職業を持っており、ラビとしての職務はそれ以外の時間に当てていました。ラビが、トーラーの解釈学者および裁判官としての職務に加えて、ユダヤ共同体の教師、説教者および精神的指導者の役割を担うようになったのは中世からです。ラビはいわゆる司祭ではなく、他のユダヤ人信徒もラビと同様に礼拝を先導し、結婚式や葬式の司式をする、ということは強調するに値します。何をしてラビたらしめるのかは、その学識、法的な論争に対処できる能力、そして複雑な問題が絡む離婚のような事柄を管理できることでした。ラビの職務は、当初は報酬を得ない名誉職でした。なぜなら、全てのユダヤ人成人男性は、自分のために時間を割いて、トーラーの学習に励むべきであるとされているからです。しかし現実として、そうしたラビの職務には時間と労力が費やされるので、ラビが報酬を得る事のできる法的根拠(セハル・バタラー)が考案されました。現代においては、ラビは通常、雇用契約とその給料にもとづいて、雇用主であるシナゴグの会衆によって雇用されます。

2. 現代の役割

ヨーロッパでのユダヤ人解放以来、ユダヤ共同体、ケヒラにおいて、ユダヤ教の伝統的生活形態に非常に大きな変化が生じました。ユダヤ法の法的領域が世俗の権威に移譲されたため、ユダヤ共同体における裁判官としてのラビの伝統的役割およびその権威は大きく失われていくか、または特殊な分野に変化していきました。さらに、19世紀、解放の結果、市民権が賦与され、新たな西欧社会に進出したユダヤ人達は、ラビ達に、幅広い教養を持つことに加えて、ユダヤ人自身の歴史 およびユダヤ教の哲学の理解を有する事を望んだのです。西欧諸国においては、国がラビの叙任を公認する際、キリスト教の司祭制度に準じて、その叙任されるラビは大学の学位の資格を有することが要求されました。そのような国家の要求にユダヤ人側も応えたわけですが、こうしたことに、ヨーロッパで新たに台頭してきた各国民国家において、そうした国家の「市民」として自らの居場所を見出したい、という多くのユダヤ人達の願望が反映されています。ここには——今日におきましても、ユダヤ教の内部で続いている議論なのですが——最終的にヨーロッパ社会への「同化」に行き着いた結果、ユダヤ民族が消滅する可能性があるのか、あるいはホスト社会の文化に依拠しながら、ユダヤ人固有のアイデンティティを維持し、表現していくという「文化適用」を志向していくのか、という問題が潜んでいるわけです。

タルムードの研究・教育を行う伝統的なラビ養成機関——いわゆるイエシヴォート（単数形イエシヴァ）——が、一般の大学の教養課程をそのカリキュラムの一部に組み込むことを拒むなか、近代的なラビ神学校・神学大学が誕生しました。こうした神学校・神学大学では、平行して大学教育——場合によっては博士号も含むのですが——が義務付けられ、タルムード研究にはさほど重点は置かれず、新たに台頭してきた歴史的・高等批判的研究手法を用いたユダヤ学の科目が設けられました。科目には、聖書、典礼、哲学、神学および説教が含まれており、特に後者には、増大する説教の重要性が反映されていました。19世紀の中盤から60年以内に、西欧、または東欧の社会におけるユダヤ人の新たな状況に合わせるべく、ラビのイメージと教育方法および役割を変革するために、主要なラビ神学院・神学大学が設立されていきました。1827年にパドヴァ、後にはローマ、1829年にメツ、後にはパリ、1847年にヴィルナとズイトミール、1854年にブレスラウ、1855年にロンドン「ユダヤ人のカレッジ」、1872年にウィーン、1872年にベルリンにおいて「ホッホシューレ・フュア・ディ・ヴィッセンシャフト・デス・ユードン トウムス」（ユダヤ学専門大学）、1873年にベルリンにおいて正統派のヒルデスハイムによる「ラビナー・ゼミナール」、1875年にシンシナティに改革派の「ヒブル・ユニオン・カレッジ」、1877年にブタペスト「ネオログ」神学院、1886年にニューヨークに保守派の「ジューイシュ・セオロジカル・セミナリー」（JTS）。こうしたラビ神学大学の新たな展開に対して、あるドイツの正統派のラビは、皮肉を込めて以下

のように言ったといひます。「ラビが博士号(ラビナー・ドクトール)をとれば、ユダヤ教は病気にかかってしまうだろう」と。

ヨーロッパでのこうした「新しい」ラビは、当時のキリスト教の聖職者を模倣し、黒いガウン、聖職者用の襟などの服装だけでなく、説教者、学者、「ゼールゾルガー」いわゆる「牧会者・司牧者」としての役割を採用したのです。ラビはしばしば、改革派あるいは進歩派の会衆において、職務をこなし、新たに台頭してきた中流階級からなるユダヤ共同体の精神的な土台を作りました。礼拝では、端正な礼拝作法に重きが置かれ、オルガン伴奏を取り入れ伝統的な祈禱や聖歌に曲を付けました。礼拝で、男女が分かれて別々に座席につく正統派のシナゴグとは異なり、改革派の礼拝では家族が一緒に座りました。それは近隣のキリスト教会の礼拝作法を模倣してのことでした。ドイツでは、入念に準備され、格調高く、系統だっており、学術的な印象を与え、知的に洗練された説教が、博識あるラビの特徴となっていたのです。より多くの説教が会衆になされたことで、会衆はその博識ゆえにラビ達の真価をいっそう認めていたと言われていひます。実際、医者や大学教授のように、ラビも「シュプレツヒシュツンデ」つまり面会時間を持っていました。そうしたラビはまた、第一次大戦中、「フェルド・ラビナー」いわゆる従軍チャプレンとして、祖国ドイツに奉仕しました。(写真1参照)

ラビの役割や職務は、ユダヤ人が居住している社会の性質・特性によって、変容します。アメリカでは、特に改革派において顕著なのですが、ラビは、「預言的ユダヤ教」を語る社会活動家となっていひます。2枚目の写真(写真2参照)は、公民権運動が高まりを見せる中、アメリカ合衆国アラバマ州セルマにおいて、マーティン・ルーサー・キング牧師と並んで行進するラビ・エイブラハム・ジョシュア・ヘツシェル教授です。当時、他の多くのラビ達も、宗教的道義性および責任から、こうした活動に従事していました。こうした伝統が今も継続していることを示すものに、「人権活動に取り組むラビ達」(Rabbis for Human Rights)という団体があるのですが、その団体のウェブサイトをご覧いただくと、「北米では、現代の奴隷制度に関する現地実情調査を行っている。フロリダ州で、不法移民摘発や奴隷的で劣悪な労働条件などの不正と闘う農業労働者連合とラビが会おう」といった趣旨の内容に出会ひます。また、同団体のウェブサイトでは、毎年開催している「人権をおぼえる安息日」(Human Rights Sabbath)に用ひるためのユダヤ教教育の資料をしていひます。

ラビはその職務の性質上、絶えず重大な討論や共同体内における葛藤の中心に立たされてきており、そうしたことが過去数世紀もの間、ユダヤ社会に大きな影響をあたえてきました。もっとも顕在化している問題として、ユダヤ人解放後に出現した異なる教派(デノミネーション)の出現と分裂が挙げられますが、その発端は、ヘブライ語聖書に記された神による啓示が歴史的に真実であるのか、そしてユダヤ法は拘束力

があるのか、という問題でした。教義も異なるさまざまなユダヤ教の教派を挙げますと、超正統派、ハシド派(ハシディズム)、現代正統派、保守派、改革派、リベラル派、再建派、ヒューマニストなどが存在していますが、こうした諸教派の存在は、私達が自身の共同体の中で議論し、解釈する能力の証しとなるものです。19世紀の初頭、ユダヤ人ナショナリズムとパレスチナにユダヤ人国家を作る政治的願望に基づくシオニズムに関する激しい議論が、ラビ達を分裂させました。今日、事実上全てのラビ・ユダヤ教団体・教派は、イスラエルの存在を正式に承認し、教派の方針の中心に据えていますし、ほとんどのラビは、何らかのトレーニングをイスラエルで積んできてはいるのですが、イスラエル政府の政策について批判的議論が激しく続いているのが現状です。この話題に関しましては、後にお話しさせていただきたいと思います。

3.ラビの役割についての認識

私はこの20年の間、ロンドンにあるラビ神学大学であるレオ・ベック大学の学長でした。この1956年に創立された神学大学は、第二次大戦後に創立された数少ないラビ神学校の一つです。ブタペストのラビ神学校を除いて、大戦前に存在した前述のラビ神学院・神学大学のほとんどは、閉鎖に追い込まれ、ユダヤ・コミュニティは離散し、破壊されました。本学の設立の目的は、かつてベルリンにあり、ドイツのリベラル・進歩派運動のラビを養成し、1941年にナチスによって閉鎖された「ホツホシューレ・フュア・ディ・ヴィッセンシャフト・デス・ユードントウムス」(ユダヤ学専門大学)の遺産を継承することにあります。ラビ・レオ・ベック博士は、このホツホシューレの偉大な教師の一人であり、博士が没した1956年に、本学は弟子たちによって博士の名前をとって創立されました。本学がユダヤ人の世界において大変な混乱期のさなかに創設されたという事実が、私達にかつてラビ神学院で教えられていたユダヤ教伝統の古典研究を引き継ぐだけでなく、今日、ユダヤ共同体とより広い一般社会においてラビ達が取り組む必要のある技能や資質とは何かを模索することを可能にしました。

毎年1月に私達は、本学のラビ神学科の入学を希望する学生の願書を審査します。願書に記載された項目の中には、学生が考えるラビの役割と個人的資質とは一体何であるのかを書くものがあります。その質問に対する答えは学生によってまちまちなのですが、ラビが為すべき非常に多くの職務の範囲については、彼らは共通の見解を有していることがわかります。以下がそうした見解の一部です。

- 「学ぶことと教えること。他の人々にユダヤの伝統を学ぶ体験を分かちこと」
- 「信頼できるリーダーシップと深い謙遜さ。人々からの是認や賞賛を求めないでもやっていける内面的強さを十分に持ち合わせること」
- 「指導者、教師、カウンセラー。ユダヤ人的な生き方のモデルとしての指導者」

- ・「憐れみ、思いやり、誠実さ、落ち着き、強い品格、ユーモアのセンス、神とユダヤ教への愛」
- ・「ユダヤ教をユダヤ・コミュニティと一般の非ユダヤ人の世界に伝えること」
- ・「会衆の礼拝を導くこと、牧会、会衆の指導、福祉」
- ・「人々とユダヤ教の伝統をつなげる架け橋」
- ・「精神的指導者、会衆の人々と関わる外交官のようなもの、カウンセリングや鼓舞を与えるリーダーシップなど、多岐にわたるスキルを備えている」
- ・「コミュニティと個人の人格的成長の両方の領域において活動すること、ユダヤ人の誇りをはぐくむ」
- ・「あらゆる必要や問題にあって、役に立つ」
- ・「コミュニティが回る中心軸であること、精神的、具体的な問題を調整する者」

こうした複雑で、多岐にわたる働きや資質は、一般の人々がラビに対して抱く多様な期待をかなり映し出していると言えるでしょう。そのことは、ラビの仕事には可能性のある事を示唆していますが、それはまた同時に多大な負担をも負わなくてはならないことを意味します。先ほどご紹介した見解を見ても、誰もこれら全ての期待に応えることは不可能です。このことはラビ達自身も認めることです。

誰もがコミュニティの精神的指導者になれるはずなのですが、もちろんここに内的緊張があります。なぜなら進歩派ユダヤ教の世界においては、ラビは会衆に雇用され、俸給を受ける存在であるからです。彼らは自身のリーダーシップの目標を設定することと、数年で変わるリーダーシップを維持するための支持を勝ち取ることとの間の綱渡りをしなければならないのです。そうしたリーダー達にはそれぞれ異なる優先事項があるかもしれませんが、会衆がラビの給料を払っている事に根本的には変わりはないのです。

私達が生きている民主的な時代において、ラビは常に人の役に立ち、頼りやすいことが求められています。もし今日、ラビが自分のコミュニティにおいて権威を有しているとしても、それは彼がラビという称号をもっているからではなく、個人的資質ゆえのことでしょう。

「ラビ」という称号に対する期待が多すぎるということは明白ですが、そうした全ての期待をうまく実現させることなど誰にもできません。そうしたことが、ラビ達にとって重大な問題に繋がっていくのです。期待されていることが非現実的な場合、どのようにして自分の限界を受け入れるのでしょうか。自分は全ての物事を実行する事ができないということ、即ち自分も他人のように強さと弱さがあるということを認めざるをえない時、自分の限界を認める自信はどこから得ればよいのでしょうか。そのような自分の

弱さを認めることは、ラビとしての権威とその称号に伴う神秘性が損なわれる、という危険を冒すのでしょうか。しかしそのような神秘的な称号がもはやふさわしくないのだとしたら、どうなのでしょう。現代のラビの典型の 1 つは、仕事中毒の人間であり、会衆のために自己犠牲を払うほどに献身するというものです。しばしば、こうした献身は家族を犠牲にして、自分の健康や幸福をも損なわせます。このような危険のために、私達はラビの役割や働きのあり方を再考せざるをえなくなったのです。1970 年代の初頭以来、アメリカとイギリスの改革派運動における女性のラビの出現は、さらに多くの影響を与えてきました。家庭を持つ女性のラビ達は、男性以上に家事を切り盛りし、育児をすることに専念しています。これは、アメリカで女性のラビ達自身が行った調査結果の一つです。この結果は、会衆にとって有用な時間がより少ないということを意味するため、フェミニズムの見地に基づいて、異なる戦略を探らねばならないということになります。従来男性ラビの模範的な役割は、最終的に全ての責任、決定権はラビが握り、仕事のあらゆる面に関わるというものでした。これに女性のラビは変化をもたらしました。それはコミュニティの人々にさまざまな責務を委任し、ラビはそれらの人々を支えるというものです。緊急事態が起こった時にはラビはコミュニティに対して責任をもつので、この役割分担をもってしても、ラビの仕事の重圧は取り除かれたわけではありません。とはいえ、個人のスペースや家族との時間を確保し、大切にしていくということは、女性のラビと同様、男性のラビ達の課題にも上がっているのです。

多くのラビ達は、自身の能力が不十分であることを強く認識しています。問題は、多くのラビの職務・役割に境界線が敷かれていないことに起因しています。それは即ち、ラビの公的生活と私的生活との境界はあいまいであるとか、いつでも問題に応じなければならないことなどです。ラビの職務は知識や実践だけでなく、人間性が要求される数少ない職種です。全体として、ラビは、その人間性そのものをユダヤ人の世界とより広い社会に提供する者なのです。

職務における境界線の欠如と非現実的な期待という問題の認識は、ラビの養成に強い影響を与えており、特にカウンセリングのスキルの習得に、より多くの時間が割かれています。その意図は、会衆が持ち込む問題の性質をより良く理解することができるようにすることや、今後彼らが仕事で遭遇すると思われる重圧に対応できるよう手助けすることにあります。その結果の 1 つが、ラビ達が必要とするサポートシステムの構築であり、ソーシャル・ワーカーあるいはカウンセラーを手本にし、より幅広い職場内での訓練の一環として行われるものです。

4. より広い文脈でのラビの活動

前述した内容の多くで、ベック博士が「小さいユダヤ教」と呼んだものを主に扱ってきました。しかし、ユダヤ民族が存在することの本質、私達が世界中のユダヤ人とつ

ながっているという意識、イスラエル国の存在などは、私達の生き方にグローバルな重要性を加えるものです。これは単純にユダヤ人の中だけでの問題意識を意味するのではなく、さまざまな出来事が生じる中でより広い社会的枠組みと私達の果たすべき責務への疑問を意味しています。私は、女性のラビの叙任について既に言及しましたが、それが、当初どれだけ賛否両論をはらむ問題であったのかを説明しておりませんでした。公の認識では、ラビとは男性になるものであり、その中でも、女性をラビに叙任するという考えに最も激しく反対したのは、ほかならぬ女性達自身でした。恐らくその理由とは、彼女達は伝統的なユダヤ教が定める女性の生活上の役割と期待を受け入れていたからであり、そのような過激ともいえる変化が、彼女達の精神的アイデンティティの根幹に異議を唱え、揺るがしてしまうからでした。しかし結果的に、女性のラビ志願者を最初に受け入れたのは進歩派ユダヤ教、それもアメリカおよびイギリスの改革派運動でした。(注4) 今日、非正統派のラビ神学大学で学ぶ学生の半分は女性であり、数百人の女性がラビとして世界中のシナゴークで奉仕しています。しかし、さらに賛否両論を呼ぶのものとして、同性愛者をラビとして叙任してよいのかという問題があります。私が属するレオ・ベック大学は、既に30数年前からこの問題に取り組んできており、2人の同性愛者の女性を入学させることに決めました。さらにアメリカでも、同様の進展がありました。さまざまな困難にもかかわらず、ゲイ・レズビアン系のラビ達がイギリスとアメリカの「一般の」シナゴークにおいて奉仕しているということも、ユダヤ・コミュニティの生活の一部として受け入れられつつあります。

多くの面で、上記の問題は、私が前述した「文化適用」の過程の一部として捉えることができるでしょう。それは、私達の伝統が、絶えず変化し発展していく社会に適応するだけでなく、平等と社会正義を促進していく時、危険を冒す勇気を持つことをも意味するのです。

これらの問題が、内部に向けられた問題であるとするなら、宗教間対話の課題は、私達をより広い世界の舞台へと誘います。40数年前、六日戦争に関わる出来事に影響を受け、レオ・ベック大学に関わっていたラビ達は、イスラーム世界との対話を模索しました。私は、こうした活動の発端と進展について本を執筆しています。(注5) レオ・ベック大学は、毎年ドイツで開かれる一週間に及ぶユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリム(イスラーム教徒)が、一堂に会する国際学生会議を設立した大学教育機関の1つであります。学業・訓練の一環として、5年の学業期間中に、全てのラビ神学生は少なくとも一度はその会議に出席することを義務付けられており、大学卒業後も、多くの人がある会議に再び出席することは珍しくありません。はじめて会議がドイツで開催された時は、それ自体が注目すべきことであり、論争を巻き起こしました。それは、「殺人者の地」でどうしてこのようなプログラムを計画する事ができるのか、というものでした。しかし私達は、過去およびドイツとドイツ人に対する彼ら自身の偏見と向き合

うことが、戦後世代のユダヤ人、特に将来のラビ達の責務であると感じていました。この会議は来年で 40 周年を迎えるのですが、それが与えた影響は非常に大きく、数世代のラビ達のキャリアは、キリスト教徒やムスリムとの集中的な対話とそのネットワークが基礎になっており、そうした宗教間対話の活動が、ラビとしての集会の活動の一部となっています。例を挙げると、9・11 テロという痛ましい出来事が、ユダヤ暦の中で最も厳粛な期間であるユダヤ教の新年の直前に降りかかり、はっきりとその出来事に取り組まなければなりません。多くのラビ達は、イスラームの名においてなされた犯罪の報復のターゲットとなるはずの、ムスリムとの連帯を求める機会を設けました。

しかしながら、宗教間対話もまた、より広い社会的、政治的、感情的な重圧にさらされます。前世紀にユダヤ教—キリスト教間の対話を始めた二つの主要な団体は、そうした対話をユダヤ社会に対する脅威に対応する形で進めました。イギリスを拠点とするキリスト教—ユダヤ教宗教評議会は、1942 年にナチスの台頭に応じて設立され、その目的は宗教および人種的不寛容を監視し、それらと闘うことでした。こうした働きを引き受けているアメリカの団体、名誉毀損防止同盟 (ADL) は、同様に不寛容を防止する職務を負っています。ADL は 1913 年に設立され、その目的は「ユダヤ人の名誉・人権毀損を防止し、全ての市民に正義と平等を保証する」ことでした。これら 2 つの団体は、状況が変化するに従ってより広い議論を展開していますが、その背景となる基本姿勢は変わりません。ここで私は、現代のユダヤ人の生活全てとラビが果たすべき役割の背景として必然的に思い浮かぶ、二つの出来事について触れなければなりません。

5. ホロコーストとイスラエル国

20 世紀にユダヤ人が体験した 2 つの出来事は、ユダヤ的生活に大きな影響を与え、またラビ達に課題を課し続けています。それはホロコーストとイスラエル国の建国です。ホロコーストは、ヘブライ語で「ショア」といいますが、世界の全ユダヤ人人口の約 3 分の 1 の命を奪いました。600 万という殺された人々の数字でさえ、それがユダヤ民族に与えた影響の深刻さを捉えてはいません。私達は、東欧のユダヤ人社会において培われてきた伝統的ユダヤ教の学問の蓄積が失われたことや、全ての家族が命を失い、また共同体が破壊されたことに深い悲しみを今も表しています。しかし、ホロコーストで完全に消滅したものは、かつて西欧のユダヤ人が近代や理性の文化に対して持っていた熱愛でした。それは無限の可能性を約束するものであり、高まる生活の質や西欧において最終的な安住の地を見つけることができるという信頼でした。それ以来、私達は、反セム主義——19 世紀後半のドイツで考案された学術的な印象を与える「ユーデンハス」、いわゆる「ユダヤ人憎悪」という用語ですが——の脅威を敏感に意識せざるをえなくなりました。自分が何をするのかは全く関係なく、繰り返

返し憎悪の標的になるということが、どのような意味を持つのかを、ユダヤ人以外の人々が想像するのは困難かもしれません。それはあたかも自分の存在自体が、どういふわけか他の人々の気分を害すると言われているようなものであり、彼らは、ユダヤ人を排除し、屈辱を味わわせるための宗教的、イデオロギー的な言い訳をでっちあげるのです。反セム主義は、時代によって、その理論的根拠をカメレオンのように変えていくのです。キリスト教徒は、ユダヤ人がキリストを殺したという教えによってユダヤ人の迫害を正当化し、ムスリムは、ユダヤ人がムハンマドを裏切ったという理由で暴力を是認し、ナチスは、ユダヤ人を汚れた劣等人種とみなし、またユダヤ人は社会に強大な影響力を有しているため過激右派や過激左派である、といった理由から殺戮を正当化しました。この後者の考えは、「シオン長老の議定書」のようなユダヤ人が世界を支配しようと画策している、という類の偽造書類によって強化されました。この本は、アラブ世界ではどこでも手に入り、数年前まで、ここ日本でもある一定の影響がありました。(注6)

従って、ユダヤ人がしばしばイスラエル国に対する批判を、イスラエルがなしたことへの公正な政治的評価として受け止めず、むしろ「反セム主義」のヴァリエーションとして捉えていることは驚くにあたりません。無数の不正義や悪が——例えば、中東やイスラーム諸国におけるキリスト教共同体の破壊など——今日の世界においてなされていますが、しかしそれらに対して世界的規模の非難やボイコット運動は巻き起こっておらず、イスラエルばかりが叩かれているとユダヤ人は受け止めています。私はこうした認識や態度を前面に出して表明する必要があると考えます。なぜなら、イスラエルがもつパレスチナや他の隣国との関係の問題、さらにイスラエル国内に存在する多くの現実問題にラビたちが対処しようとする時、そうしたラビたちの挑戦を広く知ってもらうことにつながるからです。

シヨア(ホロコースト)の後、どのユダヤ人も、どこにいても、ユダヤ人の破壊を叫ぶ者を無視することはできません。それがイランの大統領から来るものにせよ、ハマスの公式声明から来るものにせよ。ヒズボラやアルカイダ、あるいはトゥールーズのユダヤ人学校の生徒を殺害したフランスのイスラーム過激主義者の口から出たものにせよ、それとも自爆テロを行った者を英雄や殉教者に仕立て上げて崇め、反セム的な内容の教科書を使って子供たちを洗脳することにせよ。

しかし、パレスチナ人の難民の悲惨な歴史やイスラエル政府の取った行動のために、パレスチナ人の苦しみ深く敏感になっているユダヤ人やイスラエル人がいることは事実です。自分達の同胞との連帯は、人間社会が持つ側面として自然なものです。ですが、人権、正義、宗教的あるいは政治的価値に基づく自己批判は、同じコイ

ンの裏側です。ラビ達は必然的に、こうしたしばしば矛盾する両方の価値に忠実であろうとする苦闘の渦中に巻き込まれているのです。

こうしたことが、いかに困難かは、この二日間で、私が受け取った多数のメールだけでも明白です。「新イスラエル基金」(NIF)は、イスラエルで宗教多元主義と公民権を推奨、促進する慈善団体です。彼らの援助する団体のうち、最近増加する暴力にさらされている「季節労働者のためのホットライン」というものがあります。現在イスラエルには、18万人の季節労働者に加えて、推定で4万人程の難民が住んでおり、その多くは、エルトリアやダルフル、南スーダンの出身です。ユダヤ教の祭日である、シャヴオート(七週祭)に、聖書にある異教徒の女性ルツ——典型的な難民と言えるかもしれません——の物語であるルツ記を朗読する際、「新イスラエル基金」は季節労働者と彼らの状況を記したパンフレットと難民や人権に関するユダヤ教の教えを記したノートを配布しています。「新イスラエル基金」は他にも2つの重要なイスラエルの団体を支援しています。「人権活動に取り組むラビ達」(Rabbis for Human Rights)は、ユダヤ教の全ての教派に属するラビ達から構成されており、イスラエルの女性の権利を守るような目的の他に、国の政策に反してパレスチナ人を擁護してきました。「ベツェレム」(B'tselem)は、西岸地区にあるイスラエル人権情報センターで、イスラエル政府の方針にかなり批判的であり、刊行物を出版し、研究結果を公表する団体です。

私が受け取った他のメールの中に、アメリカのユダヤ系団体から来たものがあり、「新イスラエル基金」が、毎年行われるイスラエルを支持するパレードに参加することを認められたということに抗議していますが、その内容は別に驚くにあたりません。それはどういう事かといいますと、「新イスラエル基金」が援助する幾つかの団体が、イスラエルに対するボイコットや出資の引き揚げ、経済制裁などを通して、経済戦争を促進しているというのです。そうした団体は、イスラエルに経済的に打撃を与えるために、EUから資金提供を受けているのです。世界中の大学で開かれた悪名高い「イスラエルによるアパルトヘイト2012」のイベントを写し出しているビデオを制作したかどで、「ベツェレム」はやり玉に挙げられ、そのアメリカの団体は、「新イスラエル基金」をイスラエルに対する脅威として捉え、パレードへの参加を認められるべきではないと主張します。多くのアメリカのラビが抗議の書類に署名しています。

問題を整理すれば、一方では、イスラエル国の崩壊の可能性が懸念として浮上しています。崩壊は敵国であるアラブ諸国の手によってではなく、内部の意見の相違と国民の批判によって引き起こされます。また他方では、ユダヤ人国家の本質をめぐる強い懸念があります。伝統的なユダヤ教の価値の最良のものに従って生活を送るための、活動の質が問われているのです。ラビは、これら両方の側に立っています。イ

スラエルが物理的に脅威にさらされる時はいつでも——六日戦争とヨム・キプール戦争はその中の最たる例ですが——生存が最優先されます。しかし、危機が終わったとき、こうした内部の分裂・相違は再浮上するのです。私達には決して忘れることのできないホロコーストの記憶があるため、イスラエルが破壊されるという考えは耐えがたいものです。

私は、慎重かつ公平に、こうしたユダヤ教内部の葛藤を言葉にして表そうとしてきました。それは、ユダヤ民族が抱える内部の懸念や葛藤に対して公平に対処し、同時に外の世界に対して大使の役割を果たそうとするラビの姿です。そのような公平さを保つことは常にできることではありません。

もう一度、ラビ・レオ・ベック博士の書いたものをご紹介します。これはユダヤ・コミュニティの説教者としてのラビの役割について、です。博士は以下のように書いています。

「説教においては、説教する者自身が問われている。」

ほとんどのラビはこの心情に同意するでしょう。自分一人になる時、この言葉が持つ意味に身を震わせるでしょう。というのも、誰がそのような期待に応えることができると言うのでしょうか。こういう言葉があります。ハニポールのズーシア——ハシディズムとして知られる東ヨーロッパのユダヤ教の運動家——の言葉です。自分の死と天上での審判を受けることがどのようなものであるのかについて思いを馳せた時、彼は心の中で自問自答しました。もし私が、彼らに「ズーシア、ズーシア、なぜモーセのようになれなかったのか」と問われたら、こう言い返そう。「どうして自分がモーセのようになることができたでしょうか、私はズーシアなのですから！」と。しかし、もし私が彼らに「ズーシア、ズーシア、どうしてズーシアのようになれなかったのか？」と問われた時、はたして私はどう答えればよいのだろうか。

最後に、ラビ達が、実践的・精神的な助けを求める時の嘆願の祈りを引いて、終わりにしたいと思います。この祈りでは、「イスラエル」という語句が使われていますが、それは伝統的にユダヤ民族のことを指しています：

この場所と他の場所にてトーラーの学びに励む、イスラエルの民とラビ、その弟子たちと彼らの弟子たちのために。父なる天の神から、大いなる平安と愛と慈しみ、長寿と十分な食物、救いが彼らとあなた方に与えられますように。

注 1 ジョン・D・レイナー「進歩派ユダヤ教世界連合 75 周年を記念して」(『ヨーロッパのユダヤ教』35号)、2002年、144-150頁、147-148頁。

注 2 レオ・ベック「大戦後の進歩派ユダヤ教の課題」(『進歩派ユダヤ教世界連合定例会議活動』)、1946年6月28日、53-60頁、56頁。

注 3 前掲書、56頁。

注 4 重要な脚注として、最初のラビに叙任された女性が、個人的な叙任をベルリンで1935年に受けたレジーナ・ジョナスであることがあります。彼女は、ナチスによってテレージエンシュタット強制収容所に連行され、アウシュビッツで殺害されるまで、ラビとして奉仕しました。

注 5 ジョナサン・マゴネット『他者への語りかけ—キリスト者とムスリムとのユダヤ人による宗教間対話』I.B.Tauris、2003年。未邦訳。

注 6 デイビッド・G・グッドマン「日本におけるシオン長老の議定書」(2004年10月27日エルサレム・ヘブライ大学シンポジウム「日本におけるシオン長老の議定書」)。

<http://sicsa.huji.ac.il/goodman2.pdf>

(写真1)



(写真 2)



公民権運動が高まりを見せる中、アメリカ合衆国アラバマ州セルマからモンゴメリーに行進するラビ・エイブラハム・ジョシュア・ヘッシェル教授（右から2番目）、1965年3月21日。

1列目、左からジョン・ルイス、身元不明の尼僧、ラルフ・アバナシー、マーティン・ルーサー・キング、ラルフ・バンチ、ラビ・エイブラハム・ジョシュア・ヘッシェル、フレッド・シャトルスワース。

2列目、マーティン・ルーサー・キングとラルフ・バンチの間に見えるのがラビ・モーリス・デイヴィス。